

新「共通特論 I」：臨床腫瘍学総論 放射線治療の考え方と最近の進歩

講義日：2022年5月28日（土）

講師：西村 恭昌（近畿大学 医学部 放射線腫瘍学 教授）

要旨

高齢化社会にともなう高齢者のがん患者が増加している。特に高齢者では肺がんや前立腺がんなど放射線治療が有用ながんの比率が高い。最近の高精度放射線治療の進歩としては、大きく3つに分けられる。1) 空間的線量分布の改善として、脳転移に対するガンマナイフでの定位手術的照射、あるいは孤立性早期肺がんでは定位放射線治療で手術に匹敵する治療成績が示されている。前立腺がんや頭頸部腫瘍では強度変調放射線療法(IMRT)によって高線量を合併症なく照射できるようになった。IMRTによってリスク臓器への線量を減らすことが可能となり、唾液腺障害や直腸障害などの晩期合併症は有意に減少した。ヨードの永久挿入小線源治療も広がり、前立腺がんでは患者が治療法を決定する時代になっている。このように外部照射も小線源治療も大きく進歩している。2) 時間的因子の改善としては、全照射期間が局所制御に与える影響が明らかにされ、照射期間の短縮をはかる加速過分割照射の有効性が頭頸部腫瘍、食道癌、肺癌などで示されている。3) 放射線増感法の改善としては化学療法と放射線療法を同時に併用する同時化学放射線療法が多くのがんで標準治療法となっている。

以上をまとめると、放射線療法は増加する高齢者がんにもやさしいQOLの高い治療法である。放射線療法の進歩により、治療成績の向上と晩期合併症の低減がなされている。